

キリストの光 光のキリスト

四旬節第2主日 3月8日

(マルコ9・2-10)

アブラハムは年老いてサラとの間に子どもを得た。その一人息子を神は焼き尽くすささげ物としてささげるように要求するが、この理不尽な神の要求にアブラハムは応える(第一朗読Ⅱ 創世記二十二章)。

子どもを神にささげるといふことはよく分らない。わたしには子どもがいらないから。

神は、わたしたちすべてのために、その御子をさえ惜しまずに死に渡された(第二朗読Ⅱ ローマ八章)。

聞き慣れたこの表現は神の愛を表すものであろうが、御子に死に渡す神の気持ちもよく分からない。わたしには子どもがい

分からなくとも

ないから。

司祭として、自分をささげるということは少し分かる。そのようにしようとしているから。自分の持つているもの、力や時間や能力や…持つているものは与えることはできる。与える苦しみも、与える喜びも分かる。しかし、自分の子どもをささげることとは分らない。おそらく自分が今持つている一番大切なものを手放して与え、それをささげて、子どもをささげることに比べれば取るに足らないことであろう。

子どもに対する気持ち、思いは、親にならないと分からないと思う。親は、アブラハムの気持

ちや御子を死に渡された神の
気持ち少しは分かるだろ
う。わたしよりは。

ひがむ気持ちは毛頭ない。
しかし、司祭はもつと謙虚に



ならなければならぬのでは
ないかと思ったりする。世の
父親や母親の気持ちを分か
ると言っではいけない。

イエスは自分が苦しみを受
け、十字架につけられて殺さ

れることを弟子たちに何度も
予告した。弟子たちには理解
できなかった。信じられなか
った。死者の中から復活する
なんていうことは、どう考え
ても分からないことであつた。
人はまだ経験したことのない
ことは理解できない。イエス
は栄光の姿を前もって弟子た
ちに見せたが、それも何のこ
とか分からなかつた。実際に
復活したイエスに出会って初
めてそのことを理解する。受
難を通して復活するというこ
とを。そして、わたしたちもそ
の栄光に呼ばれていることを。
三人の弟子たちの目の前で
イエスの姿が変わった時、雲

が現れて彼らを覆い、雲の中
から声がした。「これはわたし
の愛する子。これに聞け」。
親でなくても、子どもをさ
さげる気持ち分が分からなくて
も、イエスに聞く。そして、聞
いたことを信じる。わたしも
また受難を通して復活するこ
とを。

(山元眞 福岡教区司祭／カット 高崎紀子)

今週の福音

9日・月ルカ	6・36—38
10日・火マタイ	23・1—12
11日・水マタイ	20・17—28
12日・木ルカ	16・19—31
13日・金マタイ	21・33—43、45—46
14日・土ルカ	15・1—3、11—32